
言葉銀行

掌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉銀行

【Nコード】

N3484Q

【作者名】

掌

【あらすじ】

不器用な旦那って好きです 見てる分には

夫が死んだ。

20年間寄り添ってきた夫が、死んだ。

彼とわたしは高校で出会った。彼が2つ年上だった。

私たちは、出会って間もなく交際を始めた。暖かい春だった。

彼は多くは語らなかった。ただただ、黙って何かを眺めていた。

それは、動物だったり、植物であつたり、空であつたり、そして、わたしであつたりもした。

それらを見つめる彼の目は、とても綺麗で、そして、わたしのことを見つめる彼の目は、いつも以上に澄んでいた。

お互いに強く惹かれ合ったわたしたちは、すぐに結婚した。

付き合つて1年も経ってない、寒い冬の日だった。

結婚式でも彼は不必要に喋らなかった。ただただ、嬉しそうに目を細めるだけで、もしかしたら、それはわたしだけが気付いた表情の変化であつたかもしれない。はたから見れば、無愛想な新郎に見えただけに違いない。彼は、1度も表立って笑わず、また1度も表立って泣くことはしなかったからだ。

それくらい、彼は、無口であつた。しかし、彼には確かに心があつた。彼の眼差しや彼の行動から伝わる愛をわたしはいつでも感じていた。

彼が突然病に伏したのは、結婚してから、ちょうど18年目の日であつた。

結婚記念日だからと、お互い、好きなショートケーキを買って、さやかなお祝いをする予定だった。

しかし、彼は、殆どケーキを口に いれず、また、大好きなワインも飲まずに、寝てしまった。

様子がおかしいと思い、彼に理由を聞くが、決して彼は語らなかった。

ただ、「大丈夫だ。」と小さく呟いて、少し苦しそうに唸るだけだった。

そして、その日の夜中、彼は突然倒れた。送られた病院で精密検査を行ったところ、急性白血病と診断され、余命はわずか1年だった。

その日から、彼はますます無口になった。

病院に入院し、治療を行う毎日に疲れ果てている様子でもあった。わたしの名前を呼ぶ回数は日に日に減っていった。それに反比例するかのようになり、彼は、空を見つめることが多くなった。

昔はわたしのことをよく見つめていた彼だが、今は空のほうに気になるらしい。

それでも、わたしと彼の間の愛は薄れわけではなかった。言葉がなくとも、ふとした動作やしぐさ、眼差しから彼の愛情があふれ出ていた。わたしはそれで満足であった。私はそれで、十分であった。

彼は、余命1年と言われていたが、なんとか2年、持った。

最後は、わたしと、両親に見守られて息を引き取った。いつもどおりの無表情に近い顔であった。しかし、そこに潜む穏やかさは、これまでに見えないものだった。彼は、最後まで、多くを語ることは無かった。ただ、静かに、静かにその生涯を終えた。

夫がいなくなった喪失感、通夜や葬式などからの疲労感もあり、わたしは、疲れ果てていた。

夫が生前愛用していた書斎の椅子に座り、大きく息を吐く。そうすると、その息が彼の面影を消し去っていくかのように感じられて、慌てて息を吐くのをやめた。いつもよりも密やかに息をした。

わたしは、静かに椅子から腰を上げ、彼の書斎を見回った。

生前と何も変わりの無い棚、入っている書物。好きだった絵、2人

で取った写真。

すべてが、思い出となった。過去へとなった。耐え切れない喪失感から、涙がこみ上げてくる。

わたしはそれを必死に押しとどめた。これ以上泣くのはよそうと、昨日、自分で決めたことだった。

唇をかみ締め、もう一度書斎をぐるりと見渡す。すると、彼の生前、決して私に手を触れさせることの無かったものを見つけた。

机の2番目の引き出しであった。

彼は、絶対にわたしにこの引き出しを開けさせなかった。

だから、私は、この中に何が入っているのかも知らないし、開けていいものなのかの判断も付かない。

しかし、引き出しを見たたん、開けなくては、と感じた。まるで引き出しが、あけてくださいと言っているように聴こえたのだ。わたしは、少し震える手で、引き出しを開けた。

そこには、1冊のノートが静かに横たわっていた。

椅子に座り、1ページ目をめくってみる。

彼の、美しい字が、ノートいっぱいに書かれている。そして、その書かれている内容に、私は思わず涙をこぼした。あまりにも、唐突で、あまりにも、意外だったから、私は、あふれ出る涙をこらえることが出来なかったのだ。

そこには、沢山の、「言葉」が書かれていた。

1行目に、私の名前、2行目以降は「ただいま。」「ありがとう。」「

美味しいよ。」「素敵だ。」「似合っている。」「髪を切ったのか?」「今日は、一段と綺麗だな。」「愛している。」「好きだ。」「

ずっと、一緒にいよう。」「……………」

そんな言葉が、何ページにもわたって書かれていた。生前、彼が使わなかった言葉たちは、皆、このノートに集め、預けられていた。その言葉は、彼が死んだ後も、まだ輝きを温かみを放ち、わたしの

心に届いてきた。昨日した約束など、もう、忘れてしまっていた。わたしは、ノートを１ページずつめくりながら、大粒の涙をぼろぼろをながした。

わたしは、ことばなんてなくても十分だった。彼が居るだけで幸せだった。彼の言葉を、無理に求めなかった。

でも、彼は気にしていたのだ。上手く言葉に出来ない自分を、上手く伝えることが出来ない自分を、悔やんでいたのだ。

あの、無口な夫が、毎日、こんな言葉を書き連ねていたと考えると、嬉しさとおかしさがこみあげてくる。思わず、泣き笑いをしてしまった。涙は止まることはないのに、私はとても嬉しい気持ちでいっぱいだった。そして、そんな彼の不器用で堅實的で真面目な部分に、また、惚れ直した。

「私も、愛していたわよ。ありがとう。」

彼のお気に入りの椅子に座ったまま、１冊のノートを抱きしめ、夫の気配がまだ残っている方へ、小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484q/>

言葉銀行

2011年1月23日12時30分発行